

其は基督教よ
基督教會の方
きを置けり舉
獨り能く團結
ふたり是れ
に跨る大津梁
を得たる所以
と云ふに在る
と如し蓋し一
ふべきの解釋

原意なり此目的を實ならしむる所のものを實行と名づく此の目的原意を實ならしめたるものを化石（事業）と云ふ蓋し人間には此目的の甚だ大切であると共に之を實ならしむる實行の頗大なることを忘る可らず然り而して此目的を立つるとは左程難からざるも此實行に至まては聖賢豪傑も難んずる所にして天下雲の如き學生の「千二ツ」の稱を得る一大原因なりとす吾人乞ふ他日之を論せん（完）

宗教改革

第一 宗教改革の動運

杉山富樫

コンスタンチン大帝の時より後、基督教は殆ど歐洲全土に擴布せられて、其勢力實に偉大ありき。羅馬帝國は既に破壊し、北狄蠻人は益々暴力を逞ふし、社會の安寧秩序は亂れて、茲に中古の暗黒ある時代は來れり。基督教は此支離滅裂ある時代に於て、依然として其勢力を有ち、社會の一致を保持する唯一の羈絆として残り、或は新來の國民を教育し、或は之を教化して敬虔を修練せしめ、以て新舊の國民を合一し、或は文學の保護者となり、或は美術の奨勵者となり、或は賢才英俊を網羅して十分に才藝を發揮せしめ、或は武士をして高潔閑雅の精神を修養せしめ、以て千有余年の間文明の保護者として天下に雄飛せり。實に中古の暗黒時代に於ける基督教の勢力と其効驗とは決まて消滅し去る可らず。

中古の暗夜は既に更け、近世の曙光は漸く東天に現はれたり。第十六世紀は正に中古の鴻荒^{ケイサス}の產出せる近世の文明が世人に認識せられし時あり。火薬は發明せられて戦争の方略は一變し、從て封建の制度に影響し、活版印刷機の發明は世界の思想をして互に比較し相競争せしめ、羅針盤の應用は遠洋

は言はん「吾
人非正し
羅巴人也如
手傍觀此の惡
長して惡性
心許さんや
得意想ふべし

航海の冒險を盛ならしめ、新大陸發見せられ、古文學復興し、茲に封建割據の時運一變して自由進歩の精神勃興するに至れり。是に於てか世人は警醒し終に社會の局面更新す。然るよ之と全時よ宗教界の弊害惡習は顯然として社會に現はれ來れり。此時羅馬教會は專制壓抑を逞ふし、其腐敗は殆ど其極點に達せり。羅馬教會の教義は新學術と相容れざる所あること明にされり。羅馬教會が聖書に鐵鎖を施して講讀を禁制するは、自由探究の精神に悖ることあらざるや疑はれたり。是に於てか世人は漸く羅馬教會を嫌惡せり、終に改革の急務あるとを絶叫せり。嗚呼此時羅馬教會にして輿論の要求を容れて十分に改革の實を擧げしからんには、世人は羅馬教會を近世文明の伴侶として歡迎し、羅馬教會もコンスタンチン大帝以後千有余年間の効果を完ふするを得しや明白あり。然れども大厦の崩壞は一木の支る所にあらざる如く、羅馬教會の中の達觀者の警醒を終に採用せられずして止むなく改革運動は起り來れり。

世界の氣運は大人をして蹶起せしめたり、大人は起ちて改革の運動に斡旋盡力せり、基督教は終に新文明の主義を採用せり、羅馬教會の妄說怪論は放棄せられたり、聖書の自由探究は始まり、救濟サルケイションは行爲によるにあらずして信仰よよるものありとの教理は主張せられたり。社會は既に思想の自由を得、新鮮なる學術を得たる際されば、此新基督教を歡迎せり。是に於てか宗教改革の運動は靡然として歐洲大陸を蔽ひ、終に舊教と對峙して社會に勢力を振へり。

宗教改革の運動は「チユートン」種族よよりて起されたり、而して「ラテン」種族の國民は之に反抗せり。然ども宗教改革の運動は決して種族間の爭端に陥らず、實に中古の舊思想と近世の新思想との衝突たるあり。又教會の腐敗と良心の純潔との衝突たるなり。即ち宗教改革は精神的革新を意味す。宜

なるか否、其淵源たる所深遠にして、其影響する所も亦た宏大なるをや。

『余は新教主義が法王等の精神的君主に對する反抗たりしことを否まず、否言に之を否まざるのみならず、第二の動作としては、彼の清教徒ピュリタンの反抗として現れ、第三の動作としては、佛國の革命とて現れたることを信ず。蓋し精神的の事は必ずや物質的の事の端緒とあるものあれば、彼の新教主義は即ち後代の歐洲歴史の分枝せる大根本たり』

第二 年 表

一四八三

ルイサー、エイズレベンに生る。

陰謀王ルイ十一世死す。

美術家ラフェール生る。

古文學者エラスモス十三歳。

天文學者コーバルニカス十歳。

詩人アリオスト九歳。

博學者アンゼロ八歳。

史家グイックシアルディニ一歳。

一四八四

瑞西改革家ツウインググライ生る。

一四八六

バルソロミニュー、ディアズ亞弗利加好望峰に至る。

一四九二

コロンブス新大陸を發見す。

一四九四

チャールス八世伊太利を侵す。

一四九七 バスコダカマ 印度航海を開始す。

一四九八 メランクン生る。

フロレンスの改革家サボナローラ殺さる。

一五〇九 カルザイン生る。

英王ヘンリー八世即位す。

ルーサー始めて僧職に就く。

一五二三 レオ十世法皇とある。

一五一六 エラスモス其譯希臘語新約書を公にす。

一五一八 法皇使者を遣してルーサーを諭す。

一五二一 ルーサー、ウォームスに演説す。

葡人マゼランの鑑隊世界週航を終る。

第三 改革時代の氣運

第十六世紀は歴史上最も注意すべき過渡の時代にして、當時は何れの社會に於ても一大轉歩をくしては適はざる氣運に到れり。之を例へば寒威料峭滿目荒涼たる光景が、星宿回りに漸く梅桃相競ひ、野禽相歌ふの候とされるが如く、第十六世紀に於て社會に文學の復興地學の發見等の如き續々發し來れるは、正に支ふ可らざる勢なりと謂べし。既に此氣運に際す、如何ぞ宗教に其影響をからざらんや。蓋し宗教改革は當時の氣運が産出せる一大事件なりと斷言するを得べし。請ふ吾人は今當時の社會は如何なる状態にありしかを看ん(前表を參看せよ)

改革の事たる
件は則ち大事
なり。雖も氣運
發跡に過ぎず
氣運の大なる
と云はんか浩

云はんか實に
す可らざるも
り誰か之を端
人得るものぞ曰

千四百八十二年マルチン、ルーサーがサクソニーの一小村エイレンスベンに呱呱の聲を揚げし時は、即ち伊太利の美術家ラフェールが誕生せし時にして、瑞西の改革家ウルリッヒ、ツウイングライの誕生より先つこと僅に一年、而て佛國の陰謀王ルイ十一世の逝去せるも亦た此年にまて、古文學の泰斗エラスモスは正に十三歳の幼童たりしあり。又當時葡人は遠洋航海の業に忙しく、彼のバルソロミュー、ディアズが亞弗利加の南岬に達せし時は、ルーサーの三四歳の頃なり。而て此時歐洲西部の國民は既に略々其團結を鞏固にし、北部王國の魯西亞は正にイヴァン大王の經營の下に改進の緒に就けり。エロンブスが新大陸を發見せし千四百九十二年にはルーサー及びツウイングライ未だ十歳に満たず、ヴァスコダガマが始めて印度航海を開きし千四百九十八年は、ルーサーの輔佐者メランクソンの生れし翌年にして、フロレンスの改革家ジエローム、サポーラが「罪惡の妖怪」と評せられたるアレキサンダー六世に斥けられ、非命の死を遂げし年あり。

佛國のジョン、カルヴェンが誕生せし千五百九年はルーサー僧職に就きし時にして、又彼の法皇より「デッフェンダー・チーフ・ゼラ・エイス」「信 仰の保護者」ある稱號を受けし英王ヘンリー八世の即位せし年あり千五百十七年ルーサーがウィッテンベルグの教會の門戸に九十五個條を公にせしは、有名なるエラスモスが其譯希臘語新約書を公にせし翌年ありき。又此より四年を経てルーサーがウーラムス議會に於て、堂々の雄辯を以て炎々たる熱誠を表はせしは、正に葡將マゼランの艦隊が最初の世界週航を終りし年なりき。又伊太利の詩家アリオスト、全史家グイックシアルデイニ、及び文學界の代表者とも云ふべきミカエル、アンゼロは、ルーサーと時代を共にして、或は文學界に或は技術界に、獨創の學識を發揮して學術の進歩を著大にせり。之に加るにルーサーがヴァルドバルグに隱遁して、聖書翻譯の大業に従事せる時は、ルー

サーよりも十歳長せるニコラス、コパルニコスが深更九天を觀測して奧妙ある學理を確め、天文學上の一大革新の基礎を固めつゝありし時ありしあり。

約々第十六世紀は實に春陽の來復せる時節なり。第十五世紀の後半より社會は漸く警醒せり、万事活潑々たらんとして元氣勃勃たるに至れり。進歩と自由の警語は世界に反響せり、商業と貿易は益す其區域を廣ふし且つ其勢力を増せり。彼の文學に技術に發見に宗教に政治に、大業を建て偉功を収めし人物は、畢竟此氣運に乗して社會を指導せし達觀者たるあり。彼等はたゞ久しく感染せし妄説及び制度の破壊を憂慮失望せる守舊家に反對して、漸く警醒せる社會を進歩せしむる爲めに身命を獻せざる改革家たるあり。果して然らば實に當時の氣運が此等の人物の手腕を仮りて、一大轉歩を爲せるものあると、推知し得て餘ありと云ふべし。

第四 宗教改革の淵源

宗教改革は勿論宗教界の大事件あり、然れども嘗に宗教界に波瀾を起せしに止らず、延て政治文學の上にも亦た一大影響を與たり。世人は此事件を以て非常に驚駭すべきものありとす、然り此事件たる、實に歴史の上に演せられたる精神的革新の最大なるものにして、その關係する所廣く且つ遠き、恐く之に過ぎざるもの殆んど稀あり。然れども詳に其淵源を考ふれば、宗教改革は數百年間能く準備せられたる一事業が、ルーサー乃時代に至りて始めて發現せらるゝ、世人をして喫驚するに至らしめしものあり。

米國の史學家云へるとあり。『天命』の歴史上に爲す方法は決して魔術的にあらず、其事變の宏大なるに應じて、之を産出する爲めに用らるゝ時も長く、且つ其元素も亦た複雑あり。其事變の案外にし

遇を問へば則
其行動を問へ
ち順世の警醒
る亦難哉

共に深且遠し

て驚くべきが爲めに其原因も悠遠ならざる如く考へらるゝは誤謬ありと云はざるべからず。プロテスタント」の運動も、動もすれば夜半の大陽の出現を見しが如く、背理にして喫驚すべき事ありと認めらるゝに至る。然とも實は此出來事は必周到に準備せられたるはあく、又此出來事は必その原因の遠きはなし。』

宗教改革時代の起點は千五百十七年ルーサーがウイテンベルグに於て九十五箇條を揭示せし時あり。然れども其原因する所を尋れば遠く初代に溯らざる可らず。試に初代の歴史を翻せば、宗教改革の萌芽とも稱すべきもの少からず。彼の第四世紀の異端争論及び第九世紀の教理争端、例へば聖餐に關せるパスチャシアス、ラドヘルタスとラトラムナスとの議論、若くは運命預定説に關せるツモン、スコタス、エリゲンとゴッツシャルクとの論争の如きは、皆な教長の審判に依りて靜穩に歸せしも、此時より漸く宗教の儀式信仰を一層簡短ある形式に改めんとする論者起るに至れり。彼の「ボウリシヤン」派「アルビヂエンス」派「ウアルデンス」派「カサリ」派及び「レオニスト」派の如きは、十二三世紀の頃より大陸諸邦に起り。又英國の「ロツラルド」派「ボヘミヤ」の「ハッス」派の如きは、後代の「ピユリタン」派「ヒユージェン」派の祖先とも云ふべきものあり。此等は何れも羅馬教會の華美ある儀式及び背理の教義に反抗して起りしものにあらざるはなし。而えて又千二百二十年前後より於て法王の權威赫々たる時に當り、奢侈遊惰厭世の教義に反對えて蹶起せしは、實に「セント、ドミニック」派及び「セント、フランシス」派あり。又第十四世紀に於て「セント、ジエロム」派は羅馬教會の束縛に反抗して起れり。而して此世紀に於て或は教會の惡弊を論じ、或は僧侶の奢侈を難じ、或は聖書を英語に翻譯し、而して新教の教理に類似せる新説を主張して大に氣焰を吐きしは、實に有名なるツモン、ウィックリッフに

あらずや。第十五世紀に至てピサ會議(千四百九年)コンスタンス會議(千四百十四年)及びバツセル會議(千四百十八年)に於て、クレメンテス、エイリー、ガーンン等の如き人物は、大に羅馬教會に反對して當時の積弊を痛説極論せり。

クレメンテスは慨然揚言して、墮落の事情を世界的精神の發達に伴へる殷富奢侈の増進に歸し、教會及び僧侶の等級位階の改正すべきを論じ、僧正の驕慢にして貧婪なる、不道德に陥りて僧官賣買に耽れるを攻撃し、黃吻の若輩にして學を修むると十分ならず、偏に僧職を得る速かあらんとに齷齪し、又腐敗の偏き處千人に一人も、神聖にして嚴格ある生活をなすものなきに至り、尼刹の如きは聖所の名を飾りて、妓樓の實ありと論難せり。而して又當時の偉人僧正ジュリアン、セツサリニが法王ユーゼニアス四世を諫めて、其バツセル會議を解散せんとせるを不可とせる時に、當時の弊害を極論したり。其書の一節に曰く、『輿論は僧侶が其義務を忘れ神聖ある生活を棄て、顧ざるを怒り、大に激せるを以て、若しも善後策を施すに非ずんば、羅馬教會は根底より轉覆するに至るや、昭々乎として顯著あり』。

第十六世紀以前に於て、既^①に宗教界の狀勢月に年に急激^②になり、歐洲諸國何れにも一大革新の來らざる可らざる氣運に向へり。宗教改革の時代は單に公然その發現せるものたるに過ぎず。知るべし、近世に於て大事變の一に數へらるゝ宗教改革は、實に其原因遠く且つ複雑あるものなることを、史家の稱して『此出來事は周到に準備せられたるは無く、又この出來事はその原因の遠きはなし』と云ふ、蓋し過言に非ざるなり。

第五 宗教改革の原因

夫れ之を平解
れば凡う物事
に限り最
二段に
ごも之を切
機運は按外
る云々の理
らず

『輿論は僧侶がその義務を忘れ、神聖の生活を棄て、顧ざるを怒り、大に激せるを以て、若しも後警策を施すに非ずんば、羅馬教會は根底より轉覆するに至るや、昭々乎として顯著あり』とは、既に羅馬教徒の有力者が絶叫せし所あり。況して局外者より遠く羅馬教會を觀察せば、殆んど嫌惡よ堪へざるものありしや明白なり。今羅馬教會の狀態を探究せん。

(一) 羅馬教會の儀式は煩雜ありしと。　　當時羅馬法王は地上に於ける精神的主權者たりしが故に、

其威信は非常の勢力を有しき。従て儀式の如きも、法王一たび之を是認すれば、則ち實施するの効力ありしを以て、人爲的の儀式は其數を増す、幾許あるを知らざるに至れり。殊に人間は精神のことよりも、形体的のことに流れ易きものにして、人心を収攬するには形体的の最も勢力あるものあれば、嚴格なる儀式は教化の秘訣の如く思惟せられて實施せられき。然り而て莊嚴なる儀式は以て愚民を欺くを得べきと雖も、思慮ある人士を籠絡す可らず。是に於てか宗教界の有志者は此繁文縟禮を除去せんことを熱望しきり。

(二) 羅馬教會は儀式の悖理あるもの多かりしと。　　當時の僧侶は死者の爲に幸福を祈禱せり。又高僧の祈禱は美行美德なき者を赦免するを得ると主張せられたり。何人も教會に入りて此教に歸依せんことを願ふ者は、教祖使徒等の画像の下に跪き、之に冥福を願はざる可らずと強迫せられたり。此の如き儀式は罪惡に充てる横着者には、此上もなき都合よきものありしと雖も、正人君子は寧ろ其悖理なることを洞見し、其改めざる可らざることを信せり。少くとも彼等は基督教の本色は果して如何あるものなるかを疑へり。

(三) 羅馬法王は專横ありしと。　　羅馬法王は精神界の主權を有し、宗教界の事は一として其意の如

くからざるものなかりき。彼は他人の罪惡を赦す權を有せり、法律を制定する權利を掌握せり、租税を徵收する特權を使用せり、政治に干與する自由を有せり、聖書の解釋は法王の意見の如くからざる可らざるとを命令せり、即ち法王は精神界の專制君主にして、其權威は無限りき。見識なき者らんに、法王の治下に甘するを得ん、されど苟も自家の理法の支配に服し、其指導に従ふものからんには、法王は到底之を戴く可らず。志ある者は既に此點に就て幾分の不滿あるを免れざりき。

四僧侶徒輩の腐敗其極點に達せしと。羅馬教會は久しく社會に勢力を振ひて、教化の任務を盡し、慈善の事業を勵み來りしが、僧侶の徒輩は既に安逸に慣れ放蕩に耽る弊風に陥り、爲めに羅馬教會は腐敗の極點に達せり。或は學を修めずて僧侶を充し、或は不道徳に墮落して善を飾り、或は僧職を賣買して私利を營み、或は法王の權威を侮りて愚民を威嚇し、或は寺刹に妓妾を蓄へて之を意に介せず、或は政治に干與して國家の秩序を危ふし、毫末も僧侶の品位を有せず又宗教家の資格を備へざりき。世人は甚ましく此腐敗を攻撃せり、而して終に僧侶輩の中にすらこの腐敗を痛論するもの起るに至れり。

五自由探究の精神の勃興せしと。文運は復興せられ、發明及び發見は相尋て到り、社會は活氣を得又勢力を増せり。從て固陋ある思想は排斥せらるゝ、是に自由探究の精神は勃興せり。千四百五十六年には聖書拉典語にて印刷出版せられて研究の便を加へ、又原語にて聖書を研究するもの、例へばエラスモスの如き學者續々輩出し、漸く基督教の真相を發揮し來れり。是に於てか羅馬教會の教義儀式の虚偽背理あると愈々明白にされり、而して當時社會は一般に人智進歩して中古神學に満足せず、自ら新氣運を歓迎するの止む可らざるに至れり。

假路に横ばる宣
世人狐狸を問は
りしこみや

教的(本分)人爲
(註釋) 天主教
して然らば宗教
革は則ち註釋取
騷動のみ

々己が各自を主
するは固より可
り否な此の如く
知らず往々羅馬
山を以てしたる
なかりしや吾人
世人は羅馬本山
がた一箇の各自

(六) 各國の教會自治を要求せしと。 各國の教會が羅馬教會より精神的支配を受くるはあは之を甘

するを得、然れども萬事うの束縛を受け、種々の重荷を負擔せしめらるゝに至りては終に忍ぶ可ら
ず。且つや法王の徵集する多額の財實は布教慈善の爲めに使用せらるゝに非ずして、皆な矯傲奢侈の
用に費さる、誰か之を見て憤然歎息せざらんや。彼等が隱然其命に服従する所以のものは、唯だ心中
に迷信する所あるに因るのミ、而して社會は大人の警醒によりて漸く迷信を排はんとす、羅馬教會の
地位大に危からざるを得ず。

之を要するは宗教改革は直接に次の三個條を原因として起り來れり。

(一) 制度の改革。 宗教改革は地方の教會の制度を改革せんとするよりも、寧ろ法王政治に反對し
て起れり。末流の僧侶の黜陟よりも、寧ろ監督僧正の黜陟を主として起れり。改革家は法王の權威を
拒絶せり、高僧の腐敗を攻撃せり。要は唯だ本流を清潔にせんと欲せしのみ。

(二) 教義の改革。 改革家は唯だ原初の教理を回復せんと欲せり、故に彼等は罪惡は唯だ信仰に依
りて赦免せるべし、義人は唯だ信仰に依りて救はるべしと主張せり。彼等は聖書は羅馬教會の儀式を
是認せざるを主張せり。又彼等は晚餐に關する羅馬教會の教義は聖書の本意に非ざるを主張せ
り。要するに改革家は基督教の真相を發揮して真正の信仰を得んと欲せしなり。

(三) 自由探究。 改革家は信せり聖書は各自之を探究すべきものあり、法王は決して各自の理性に
勝りて勢力あるものにあらず。而して彼等は何人も直接に上帝に近接去得べく、決して法王の媒介を
要せずと主張せり。

宗教改革者は以上の三個條を要求して蹶起せり、而して當時の氣運狀態は彼等の運動を歡迎輔助し

るを承認せざる
らす

て、終に宗教改革ある一大事變たらしめ、茲に精神的大革命を爲すを得せしめたり。

第六 宗教改革の事業

第十六世紀の改革時代の前に於て「罪惡の妖怪」アレキサンダー六世は親ら盛れる劇毒に斃れ、武斷政略家シュリフス二世は位に在ると僅にして、美術王レオ十世は「メティチ」家より法王に撰擧せらる。彼は文學美術に通じ、政治の才略ありしかども、法王として潔徳に乏しうりき。故を以て教會内の惡弊は毫も改革せられず、却て益々甚きを加へたり。奢侈淫亂は之を云ふに忍びず、偽善驕慢は之の極點に達しき。實に第十六世紀の劈頭に於て既に宗教改革の氣運十分に熟し居りしあり。時も時あり、此時改革家をして奮然蹶起せしむる事件起り來れり。

是より先き羅馬の巨額ある歳入は、美術建築に浪費せられ、屢々財庫に空乏を告げ、經營意の如くならず、終に『大祭年に當りて羅馬に巡禮するものは、エルサレムに至りて教祖の墓を拜すると全しく、犯罪免許を受くべし』と令するに至れり。而して百年に一回大祭を施行し來りしが、改めて五十年にちし、更に改めて三十三年にちし、三たび改めて二十五年に一回の大祭をあすことにちえ、以て四方の人民を集めしが、後には羅馬に巡禮する者も多うらざるに至れり。是に於てか更に令して羅馬に來らざる者も、若し金を納むれば全しく免許を受け得べきことを定めたり。而してサクソニアには「ドミニカン」の僧テウツェル來りて免許狀を發賣せり。事態既に是に至る、あに誰か慨然としてその誕妄兇惡を憤らざらんや。ルーサー斷然決心きて、終よ千五百十七年十月晦日を以て、有名ある九十五個條をウイテンバアグ教會の壁上に公示せり。此告白書ころ當時志あるもの、盡く告白せんとして能はざりし所のものをあま、ルーサーは唯だ彼等に代りて斷然たる處置を爲したるのみ。是に於てか日耳曼

は則ち銅臭の纒
は則ち金言の纒

の宗教界は、ルーサーの放ちたる導火の爲めに燄々として燃え出せど、此火到底羅馬教會を燒かすんば滅せじ。

むを得ざればな

レオ十世はルーサーの所爲を聞て冷笑看過せり、是れ例の僧侶間の爭論たるに過ぎじと信せり、而してメカエタナスをオグスマンに遣はして彼を訓諭せり。ルーサーはサクソニー侯ジョウツの面前よ於てカエタナスと議論せり、此會合はルーサーをして止むなく宗教改革家として、羅馬教會に反抗せざる可らざるに至らめたり。抑もルーサーは此時まで毫も羅馬教會に反抗せんとは思はざりしなり、彼は『もま人法王を譏誣するあらば、我は其頭を斬るべし』と揚言せるほど法王に忠實ありき。然れども命あるか否、彼は今や斷然として法王を敵とせざる可らざるに至れり。法王は更にエックを遣はして、彼を去て其説を改めしめんとせり。然れどもルーサーの意志鐵石の如く終に動す可らず。是に於てか法王は破門狀を發し、令して其著書を燒くしむ。然れども日耳曼の大半は法王の命を奉せず、ルーサーはエルブ阿畔數多の觀衆の前に於て、Exurge Domineを燒き棄て、以て翻すべらざる決心を示し、世人の自由公正及び熱誠の精神を鼓舞作興せり。時に千五百二十年あり。翌年チャールス五世はウァームスに於て全國議會を開きルーサーをして其主旨する所を述べしむ。ルーサー保護証書を受け百難を顧ず、奮然王の前よ其説の改む可らざるを辯じ、聖書の信奉すべく、法王の奉載すべからざるを説く。而して此信念終に奪ふべくもあらず、滿堂の王公貴族も大よ之を嘆賞し、武士農民も亦た之を援く。

宗教改革の氣運は益々盛大にあれり、而して此と全時に武士農民は兵器を執りて自由を主張し驕傲の舉動を爲せり。然れどもルーサーは深く之を戒め王公の權に干渉すまじきことを諭せり、是に於て

日耳曼の王公は始めてルーサーの國政を擾亂するものにあらざることを悟り、終に之を保護して法王及び皇帝の權勢を殺がんことを謀るに至れり。是より宗教改革の形勢一變す。

千五百二十九年四月チャールス王スバイヤスに議會を開き、王公過半の決議によりて、宗教の事件は悉く宗教議院に於て議すべく、且つ次年の議會まで改革運動を休止すべきことを要求す。然れどもルーサー派の王公は之を聴かざりき。彼等は十分に『進歩は生命なり、改革運動を休止するは是れ自殺あり、吾が徒斷して之に従ふ能はず』と抗論せり、而して彼等は「プロテスト」(辨駭書)を帝に上れり。是よりルーサーの派を稱してプロテスタントと云ふ、蓋し抗論者の義なり。彼等は此稱號を甘受せり、何と云へば彼等は飽くまで正義の爲め自由の爲め又良心の爲めに、其敵に抗論するは其義務責任あることを信認したればあり。

之より先きルーサーが宗教改革を主張し、羅馬教會に反抗するや、其反響は四方に起れり、瑞西先づ改革の聲よ調和し各國皆な之に次ぐ。而してルーサーが九十五個條を公にせしより十年を出ずして、宗教改革の議論は殆んど天下の有力者を網羅して非常の進歩をなし、二十年を出すまで第一の凱歌を奏することを得たり。

之を要するに、宗教改革の主唱せられてより、暫時にして天下の人心を収攬し、近世史よ於ける精神界の一大革新を成就するを得しは、實に時勢の然らしめたる所あることは前條述ぶる所によりて判知し得て餘あり。畢竟ルーサー、ツウイングライの徒は、時勢の産出せる大人たり、彼等は當時千万人の有せる滿腔の熱情を代表して之を暴露せしのみ。然り而してルーサー、ツウイングライの徒あるにあらざるは、誰か此大業よ當るを得んや。當時流血の慘状なきにあらざりしも、天下の人心を自由に

も之を已めしめ
と欲す迂も亦甚

し社會の思想を更新せし效果は、之を嘆賞せざるを得んや。

期の如くして宗教改革の事業は進行せり。然るに第十七世紀に至りて、一時其大勢に一大挫折を來せり、而して幾分か新舊兩教相調和する傾向を生ぜり。何故に第十六世紀の一大革新の勢力が、かくも挫折するに至りしかを知らんには、種々の狀況を察せざる可らず。思ふに王公武士の輩が改革運動を利用せんとせまこと其原因の一なり、又宗派の分裂も其原因なり、其他三十年戦争の影響、不信仰の流行及び羅馬教會内の革新等も、亦た其原因に數へざる可らず。

然りと雖精神的革新は、或る時期を以て終を告ぐるものにあらず、社會進歩之人智發達すれば、益々其の革新は盛に繼續せらる。看るべし、第十六世紀に端緒を有せる精神的革新は、近世の歴史を一貫して今日に至れるを。

これ唯々宗教改革ののみならず思ひ改革なる所以なり

雜 錄

時 文 摘 話

(第二)

助教授 黒 本 植

○則の字を妄に用ふる事

是も、漢籍より誤り來れるものと、うは、漢字の則の字は、説文にも、「曳詞之辭也」とありて、我か邦の詞に、譯すとさは「是ハ」「セバ」「スレバ」「スルキ」などのハ、バトキに通ふ辭なり、其の例を擧げば、孟子に、

孟子曰、吾今則可ニ以見一矣、不レ直則道不レ見、我且直レ之、